

PIC シンボルに見る絵記号の言語学と言語の形成の原理

高橋 亘

関西福祉科学大学社会福祉学部・大学院社会福祉学研究科

近年、我々は PIC シンボルを用いたシンボル・プロセッサを構築し、日常言語に興味を示さない知的障害児や自閉症児の中でのものの形や色に強い興味を示す児童のための意思表示・概念形成に資する研究を推し進めてきた [1,2]。

絵記号による二語文メッセージの詳細な観察は言語学の多くの原理を照射することになった。我々は言語概念が未生の状態における言語形成の問題と対面することになったのである。そこには記号の表象性と含意性の問題が潜んでいた。さらには言語形成の自然な語順と格の形成の問題が潜んでいた。こうした問題は人類が始原言語を形成するときに直面した問題である。

これらの問題については、歴史言語学や言語類型学の多くの先行研究が存在する [3-6]。しかし近年の認知科学の成果を考慮に入れたものは少ないと言える。

近年の認知科学の知見をもとに人類の言語の形成を考えるならば、最も初期の言語には、〔名詞〕が一次感覚野と結びついて形成され、ついで、運動前野に関係する〔動詞〕が形成され、〔名詞〕〔動詞〕の結合が形成されるのが自然である。その後、格の形成が必要となって、接置詞（前置詞もしくは後置詞）が形成されていく。こうした認知の機構に従って世界の個別言語が形成されたと考えられる。このような認知の機

構に対する視座は絵記号による言語形成にも重要である。

今後は、当発表の成果を踏まえてシンボル・プロセッサの設計や PIC シンボルのデザイン、PIC シンボルを活用した LL ブックの制作に取り組むことになる。こうした取り組みの例が、今大会において共同研究者によって発表される [7]。

参考文献

1. 高橋 亘, 柳内英二, 池田茉莉子, “PIC シンボル・プロセッサの実現と視覚記号の言語学”『総合福祉科学研究』, Vol. 1 (2010) 101 ~ 114.
2. 池田茉莉子, 柳内英二, 高橋 亘, “M 言語による PIC シンボル・プロセッサの実現と視覚記号の言語学”, 『Mumps』, Vol. 25 (2010) 35 ~ 50.
3. 角田太作, 『世界の言語と日本語-言語類型論から見た日本語』, くろしお出版(初版 1991, 東京).
4. 近藤健二, 『言語類型の起源と系譜』, 松柏社 (2005, 東京).
5. 松本克美, 『世界言語への視座---歴史言語学と言語類型論』, 三省堂 (2006 東京).
6. リンゼイ J. ウェイリー著, 大堀寿夫他訳, 『言語類型論入門---言語の普遍性と多様性』, 岩波書店 (2006 東京).
7. 高橋 亘, 柳内英二, “M 言語による PIC シンボル・プロセッサの三語文脈判断機能と電子 LL ブックの構成”, 第 37 回日本 M テクノロジー学会大会予稿集.